

フェリスの上代文学

桑 川 光 樹

今は「日本文学科」に改まっているが、当時の学科は「フェリス女学院大学国文学科」というもので、その名称には、ハイカラな片仮名の「フェリス」と、黴臭い漢字の「国文学」とが「女学院大学」をはさんで、呼び合いつつも対峙しているという図式があった。それは、木に竹を継いだ、というのとも少し違い、ナイフとフォークで寿司を食う、というのとも十分に同じではないが、何か「異質性の同居」といった印象を漂わせるものであった。

すなわち、「フェリス」という名には、明治の文明開化と、アメリカ伝来のキリスト教の香り、さらには私学の自由な教育理念とが色濃くにじんでおり、一方「国文学」という用語そのものは、江戸以来の国学の伝統を主流とし、ドイツ文献学を加味しつつ、新しい国家主義の権威によって、明治二十年代の国立大学でまず定着をみたものであった。こうしたそれぞれの背景の重みを考えれば、

その名称の、片仮名と漢字に挟まれた「女学院大学」などはもうペチャンコに押し潰されても当然なくらいなのであった。

しかも、目を凝らして見るならば、肝心の「女学院大学」の五文字さえ、理念として一枚岩というのではない。そこでは「女」と「学院」と「大学」とが三つ巴の状態になっている。おそらくまずフェミニズムの問題から考えなければなるまいが、この三者の関係を論理的に説明するのは、これまた難しいことである。

しかし、両側からの巨大な重圧にもかかわらず、幸い、真ん中の「女学院大学」はペチャンコになることもなかった。言ってみれば、片仮名の部分は土着化して平仮名のような感じになり、漢字の部分はその後「日本文学科」という名に変わって、これも黴の臭みを脱したように思われる。横文字の違和感が薄れていく過程は、昔、木の文化に金属の文化が融合していったのと似通うものがありそうだ。

また、「国文学科」が「日本文学科」に変わったのは、「国文学」が過去の国家中心意識を離れて客観性・国際性を獲得しはじめたことの一証左であろうと思われる。かように、学科の名前一つを取っても、そこには文化的な問題が横たわっており、興味はなかなか尽きることがない。

私は一九七三年四月から一九八一年三月までの八年間、その国文学科にお世話になった。就職の時、私にとって魅力であったのは、それが高木市之助先生ゆかりの学科であるという点であった。私は、『吉野の鮎』や『古文芸の論』に示されたような、高木さんの先駆的な業績に敬意を抱いていたので、高木さんが築かれたフェリスの国文学科という場所で、その学統をつぐ仕事に従うということに、またとない意義を感じたのであった。先生はすでに現職を退いておられたが、必ず聲咳に接する機会はあるであろうと楽しみにみておられた。だが残念なことに、先生は翌一九七四年に亡くなり、私はついに拝眉の機会を得なかった。先生の広範な業績は今日『高木市之助全集』全十巻に纏められていること周知のとおりである。

ところで、私は直接には、瀬古確（せこ・かたし）先生の後任者として迎えられたのであった。瀬古さんは『太宰府囀の歌』『万葉集における表現の研究』『日本文芸史』『大伴家持の研究』などの著書によって、世に知られた学者であった。多くを教えていただけ

はずであったが、すでに体調を崩されていた瀬古さんには、結局ご生前にただ一度お目にかかることができただけであった。重ねて本当に残念なことだった。

当時、名著『萬葉集十三人』の著者の都築省吾先生が非常勤講師としておいでであった。都築さんは歌壇でもご活躍で、その白髪瘦身の風貌が歌集『入日』の歌人の印象を際立たせていた。

漢文学の田所義行先生（非常勤講師）、美術史で万葉地理に詳しい田中日佐夫先生（一般教育）の名も、フェリスの日本古代文学を語るには逸することができないであろう。授業で直接に万葉を講じられることは無かったかと思うが、ご著書を通して私なども教わるところが多かった。歴史学の土田重鎮先生のお名前も旧教員の名簿にあるが、おそらく時代を異にしたため私はお目にかかる機会を得なかったであろうと思う。

八年の後、私はフェリスから他に転じたが、去るにあたって、日本大学の森敦司教授にご無理を願ひ、残して行く私のゼミの面倒を見ていただくことになった。『柿本朝臣人麻呂歌集の研究』を初め、すぐれた業績のある碩学である。フェリスの名に免じて快くお引受けくださったことに今も感謝している。

その後、古代史学者である関晃先生が古代部門の担当者として着任され、関先生が他に移られた後、万葉学者の森朝男先生が来られ

て現在に至っている。森さんは、学界への登場の若く華々しい印象が私の脳裏にあるが、『古代和歌と祝祭』『古代文学と時間』などの著者として、今や衆望を担う中堅学者と云うべきであろう。

万葉学の非常勤の先生方には、鈴木日出男、身崎寿のお二人の名も残っている。鈴木さんは王朝文学の研究者でもあるが、和歌における心物対応という、文芸発想論の領域で独創的な業績を挙げられた。今は東大におられる。身崎さんは、額田王や入麻呂など前期万葉論から出発され、和歌と散文、時間意識の問題などにも広く議論を展開されている。今は北大におられる由である。

以上、「フェリスの上代文学」の輪郭を素描した。私はその一角を汚したことになるが、全体として見れば、その由緒の深さ、層の厚さを誇ることが許されるであろう。今後の発展が楽しみである。

一九八一年、私はフェリスを辞してシンガポール大学に職を移すことになったが、ゼミの諸君に見送られて成田を出た日のことは今も忘れられない。あれからすでに十数年、今は明治学院大学に勤務している。月日の経つのは早いもの、それにしてもフェリスの坂を登り降りした頃が懐かしい、と月並みな感想を述べて稿を閉じる事にする。

(明治学院大学教授・)

一九七三〜八一年 日本文学担当